

# 8 施設・設備等

## 1 施設、設備等の整備

### 1) 大学・学部等の教育研究目的を実現するための施設、整備等諸条件の整備状況の適切性

#### [現状の説明]

本学は品川キャンパス、宮前平キャンパス、の 2 箇所  
の校地がある。

現状の校地面積は以下の通りである。

品川キャンパス	29,180 m <sup>2</sup>
宮前平キャンパス	13,293 m <sup>2</sup>
全校地面積	42,473 m <sup>2</sup>

また校舎等建物面積、及び竣工年度は以下のよう  
になっている。

#### 品川キャンパス

1号館	4,981 m <sup>2</sup>	昭和 38 年竣工
2号館	2,174 m <sup>2</sup>	昭和 44 年竣工
3号館他	551 m <sup>2</sup>	大正 4 年竣工
4号館	1,948 m <sup>2</sup>	平成 3 年竣工
本館	1,791 m <sup>2</sup>	大正 4 年竣工
ラファエラ館	1,610 m <sup>2</sup>	平成 3 年竣工
講堂他	1,754 m <sup>2</sup>	昭和 54 年竣工
図書館	2,383 m <sup>2</sup>	平成 3 年竣工

#### 宮前平キャンパス

体育館他	2,182 m <sup>2</sup>	平成元年竣工
全校舎面積	19,374 m <sup>2</sup>	

さらに長野市飯綱に山荘がある。(現在は閉鎖中)

飯綱山荘敷地	3,801 m <sup>2</sup>	
山荘建物面積	349 m <sup>2</sup>	昭和 47 年竣工

また、品川キャンパス内には以下の学生用実験・実

習室がある。

#### a. 化学室

昭和 38 年の 1 号館竣工時に設置された。  
12 台の学生用実験テーブル、液体クロマトグ  
ラフィ、精密電子天秤、紫外線測定器等授業  
に必要な実験用具を適宜更新している。

#### b. 視聴覚室

平成 3 年度、4 号館竣工と同時に設置され  
た。大学院と共用。学内外の講演会等にも使  
用される。カリキュラム変更に応じて機器は  
適宜更新している。スライド映写機、大型ス  
クリーン、プロジェクタ、AV 装置、教卓提示  
カメラ、教員用パソコン各 1 台を装備。

#### c. 情報科学室

平成 3 年度に 4 号館竣工と同時に発足した。  
その後、授業内容の変化、機器の進歩に伴い  
毎年機器を増設、更新している。平成 15 年度  
の機器は 2 教室合計で学生用パソコン 88 台、  
白黒プリンタ 7 台、カラープリンタ 5 台、更  
にデジタルカメラ 30 台、イメージスキャナ  
11 台を装備。他各学生用デスクには教卓用画  
像転送モニタ、計 40 台、さらには教卓には教  
員用パソコン 8 台、教卓提示カメラ 2 台もあ  
る。

#### d. CALL 教室

平成 12 年度に LL 教室を発展させる形でス  
タートし、平成 15 年度に教室の増設、及びパ  
ソコンの増設、更新を行った。現在は 2 教室各  
デスクにパソコン 86 台及び教卓画像転送用モ  
ニタ 43 台、さらに大型スクリーン、プロジェ  
クタ、教卓提示カメラ各 2 台、同時通訳用ブ  
ース 1 台、白黒プリンタ 6 台、カラープリンタ 1  
台を備える。

## [点検と評価]

現キャンパスでも大学設置基準上必要な校地面積 (14,400 m<sup>2</sup>) 及び同校舎面積 (7,073 m<sup>2</sup>) はクリアしているが、以下の問題点がある。

### (1) 校舎の老朽化

本学品川キャンパスでは、これまで時代の要請に答えて電源増加工事、冷房化工事、対身障者用各種改修工事、情報化工事、耐震工事等の改修工事を積極的に実施してきた。とりわけ学生の安全を第一に考え、平成 13, 14 年度に実施した耐震工事は、阪神大震災クラスの地震が東京を直撃しても建物の倒壊を免れる、というレベルまで安全性を高めることに成功した。また、今年度は照明等の改良工事も予定している。しかしながら品川キャンパス校舎の老朽化については、教室、実習室数の 60%をしめる 1、2 号館がすでに建設後 35 - 40 年以上経過している。そのため、建物、設備の随所に経年劣化の見られることは否めない状況にある。

### (2) 教室、施設の狭隘

学科数、定員の増加に伴う学生数、授業数等の増加により、教室の絶対数が不足し、このため、時間割編成が困難になり、また、土曜日の開講も必要になるなどの要因の一つになっている。さらに、いわゆる“鯨詰め”といった状況も見られるようになってきている。

## [改善の方策]

上記の問題の有効な改善策としては、校舎の建て替えがもっとも有効な手段である。建て替えに向けて、今後の本学の教育方針を具体的に明確にしたうえで、教室のデザインを考え、設備等も教育内容に適し、時代の趨勢にもマッチし、さらには周辺の環境にも十分に配慮したものを構想するべきである。

## 2) 教育の用に供する情報処理機器などの配備状況

### [現状の説明]

現在本学には学生が利用可能な PC (パーソナルコンピュータ) が、情報科学室及び自習室 4 室、CALL 教室及び自習室 3 室、就職課資料室 2 室、図書館、各学科等研究室、学生サポートルームに設置され、すべての PC が学内 LAN を通じてインターネットと常時接続されており、日々、学生のレポート・論文の作成や情報検索等に活用されている。

なお、設置場所毎の明細は下記の通りとなっている。

情報科学室及び自習室 PC 120 台、デジタルカメラ 30 台、スキャナ 15 台

CALL 教室及び自習室 PC 兼 CALL 端末 91 台  
就職課資料室 PC 8 台  
図書館 PC 15 台  
各学科等研究室 PC 9 台  
学生サポートルーム PC 1 台

またこの他にも、学生が利用することはできないが、授業用として教員が使用できる PC が、全 38 教室中 22 教室に計 28 台設置され、授業に供されている。

## [点検と評価]

備えられている PC は、十分な台数とはいえないが、一応満足できる水準と思われる。それより要望が強いのは、回復速度を早めること、一般回線に接続できる電源を多数用意する等、周辺環境の整備に努めることである。

## [改善の方策]

PC の台数を増やすよりも、接続についての要望項目の実現に努めたい。

## 3) 社会へ開放される施設・設備の整備状況

### [現状と点検・評価]

本学では社会人対象の講座ラファエラ・アカデミアが 1993 年度に始まり、1999 年度より生涯学習センターも発足し、その生涯学習の会場が本学であることから、大学の施設・設備の社会への開放が進展している。現在のところ開講講座数は 94、受講者数は 1,188 名 (平成 15 年 4 月 17 日現在) であり、木曜日と土曜日に品川及び宮前平両キャンパスで開講している。また、会員には、図書館の利用も可能としている。さらに、春、秋の土曜日に、数回連続で無料公開講座 (“土曜自由大学”) を開き、数百人規模で品川区民が来校し、本学施設を利用している。

他方、都の文化財である建造物 (本館) 及び歴史的な庭園があるため、外部からの見学希望者も多く、随時受け付けている (大学の開学期間中は要予約)。そのための案内パンフレットを作成、配布し、さらに毎週水曜日には大学から施設の説明員が出て見学者の便宜を図っている。

また、今年度から品川区の図書館と本学の図書館、また区内の他の大学図書館との間で図書の相互貸借協定が締結された (“ふうの木ネット”)。

### [今後の施策]

本学品川キャンパスは山手線の管内で閑静な住宅街にあり、立地条件が大変良い。この有利な条件を生かして社会人講座等を一層拡充し、施設、設備の一段の社会開放に努めたい。本館、講堂等も特色ある建造物で、鑑賞、利用価値等も充分にあることから、案件次第では、外部に貸し出しする事も検討していきたい。

#### 4) 記念施設・保存建物の保存、活用の状況

### [現状の説明]

本学は旧島津公爵邸（ジョサイア・コンドル設計、大正4年竣工）という、我が国建築史上大変貴重な建築物を保持し、本館として利用している。コンドルが手がけた建造物で日本に現存するものは本学を含めて8棟、さらに、本学のように一般公開している建物は僅かしかない。大学は平成2年度に東京都からの助成金を得て、本館の内装等の補修工事を行い、その後も大学では維持に努め現況を良好に保っている。

本館は一部を講義室、教員の研究室、さらには保健室等学生の厚生施設として、あるいは会議室他の管理部門の施設として十分に活用されている。また、本館と並んで本学を特徴付ける、江戸時代に端を発する歴史的な庭園もある。庭園は職員により定期的な清掃が行われ、専門業者によって樹木の維持、管理がなされている。

4月末と11月初旬に行われる大学祭には多くの人々にぎわう。明治、大正天皇の行幸跡も庭園の中にはあり、ゆたかな緑と咲き乱れる花は、学生、教職員及び周辺の住民の方々に憩いの場を提供している。

### [点検・評価と今後の施策]

本館は、本学のシンボリックな役割を果たしている。造作は極めて堅牢であり、関東大震災、第二次大戦でも被害を蒙らなかつた。とはいえ、竣工後80余年が経過しており、建物の根幹的な部分での劣化が心配される。定期的な点検を怠らぬと同時に、耐震問題での対応を急ぐ必要がある。

## 2 キャンパス・アメニティ等

### 1) キャンパス・アメニティの形成・点検のための体制の確立

#### [現状、点検・評価と今後の施策]

キャンパス・アメニティだけを対象とした、組織、委員会等は存在しない。しかし、本学は比較的小規模なこともあって、学生課による学生の意向の汲み上げ（学生自治組織との緊密な連携、学生生活委員会での汲み上げと迅速な対応）、学生サポートルームによる、学生ニーズの不断の収集とその実現化、管理課による、職務柄日常化した、キャンパス動向注視に基づく問題意識の醸成とそれの企画、実現化等様々なルートからキャンパス・アメニティの形成、支援が行われている。しかし、平成16年度に発足が予想される、「将来構想委員会」で、校舎の建替え、キャンパス再編が検討される過程で、キャンパス・アメニティをターゲットとした、体制、組織、委員会等の立ち上げが急速に現実化してくるものと思われる。

### 2) 「学生のための生活の場」の整備状況

#### [現状の説明]

本学品川キャンパス内にある「学生のための生活の場」としての施設は以下の通りである。

ラファエラホール（学食、クラブ室）	1,610 m <sup>2</sup>
1号館食堂他	246 m <sup>2</sup>
2号館学生ホール（売店もある）	235 m <sup>2</sup>

さらに、本館内部に常勤の医療スタッフの詰める医務室、外部からの専門のカウンセラーが常駐する学生相談室がある。またこれとは別に本学独自の部署として学部上級生、大学院生による学生の総合相談窓口として「学生サポートルーム」がある。自然環境としては、キャンパスの面積の6割以上が高木の林立する緑豊かな庭園である。

さらに宮前平キャンパスには、体育授業、クラブ活動に使用する体育館、テニスコート、ジム、ランニングロード等があり、また、長野市飯綱高原には厚生施設としての飯綱山荘がある（現在は閉鎖中）。

### [点検・評価と改善の方策]

現在、約1,900名の学生がいるために、品川キャン

パスにおいては学生一人あたりの「生活の場」としての施設は1㎡少々の広さしかなく、大変手狭である。また、本学品川キャンパスは閑静な高台に位置していて、勉学には大変好適であるが、一度高台を下りてしまうと校舎に戻るのに時間と労力を要し、このため、キャンパス内に十分な「生活の場」が確保される必要がある。現在、校舎の建替え、建物の再配置、キャンパス再編等が計画されており、そのなかで、一層のアメニティ充実がたい。また現在諸種の事情で閉鎖中の飯綱山荘においても、近年飯綱地区へのアクセスが向上し保養地として環境が急速に整備されつつあることから、セミナーハウス等の学生の厚生施設として、その利用価値が今後急速に高まってくる可能性がある。

### 3) 大学周辺への「環境」への配慮の状況

#### [現状の説明]

品川キャンパスは山手線の内側にありながら、閑静な住宅地の高台に位置し、緑も多く勉学環境には大変恵まれており（第二種住居専用地域）、一方、本学の緑と旧島津邸の格調高い雰囲気は周辺の環境に一層の潤いと風格を与えていることも確かである。したがって、本学の現在の良好な自然資産、建造物等を維持し続けることが周りの環境への最大の配慮となる。キャンパス辺縁の多くの部分が斜面によって形成されているのは、心配な材料である。かつては崖崩れ、崩落等の事故も何度か起り、また、本学の樹木等をめぐるとラブルが周辺住民との間で発生したこともある。

#### [点検・評価と改善の方策]

品川キャンパスの崖崩れは、一旦発生すると人身事故につながる可能性が大きい。本学では昭和時代から、大規模な地質調査を行い、問題の多い部分について多額の費用を投じて改修工事を行い、崖崩れ防止工事を実施してきた。その甲斐あって、昭和57年以降、大きな崖崩れ等の事故は発生していない。しかし、先の調査の後21年が経過しており、また、最近周辺で、住宅・ビル開発が盛んで大規模工事が相次ぎ、本学の地質に悪影響を与えていることも懸念される。このため、近々土壌基盤調査を行い、早期に問題箇所を発見し、大事に到らぬよう努めたい。樹木を巡るトラブルについても、普段よりこまめに点検を怠らず、隣地の住民の方々と連絡を密に保ち、早期の対応を図ってきたい。

## 3 利用上の配慮

### 1) 施設・設備面における障害者への配慮の状況

#### [現状の説明]

本学では昭和53年を嚆矢に、視覚障害者を受け入れてきた。図書館にはスペイン人修道女の献身的な努力により、わが国有数の蔵書数を誇るスペイン語点字図書がある。さらに平成12年度から車椅子使用の学生を受け入れると同時に、スロープ、階段手摺、障害者対応トイレ等、学生が日常的に使用する箇所について、バリアフリー化工事を積極的に実施してきた。平成13、14年度で全館のエレベーターを障害者対応にするなど一応の工事は終了した。

#### [点検・評価と今後の施策]

バリアフリー化は積極的に進めているけれども、建物の建築年次が古い建造物（大正4年建築の本館、3号館等）は構造的に対応が難しい面もある。新校舎の建設では一層のバリアフリー化を実現化したい。

### 2) 各施設の利用時間に対する配慮の状況

#### [現状、点検・評価と改善の方策]

品川キャンパスにおいては、基本的に施設利用時間は20時までとされており、退校時刻は20時15分である。6年前まではその時刻が19時であったことを考えれば、時代の動向や学生のニーズに応じて対応を図ってきたことがわかる。また、図書館の閉館時間はかつて18時30分であったが、平成12年度よりはこれを20時に変更し、学生の便宜をはかっている。さらに、平成15年度より2つある食堂の1つの営業時間を18時30分に延長し、課外活動あるいは夕刻以降のアルバイト等に出かける学生から大いに喜ばれている。本学は女子大学であるし、また24時間研究室に詰めることもある理工学部等も有せず、基本的に夜間遅くまでの開校が必ずしも必要でない状況にある。

しかし、今後、大学院の昼夜開校、社会人学級であるラファエラ・アカデミア講座のさらなる拡大、図書館の閉館時間のさらなる延長へのニーズ拡大といったことも充分考えられる。このためには、職員の勤務体制のシフトも含め、支援、管理体制の整備を早急に図る必要がある。

## 4 組織・管理体制

### 1) 施設・設備等を維持・管理するための責任体制の確立状況

#### [現状の説明]

本学五反田キャンパスの施設、設備の維持、管理は管理課で行っており、管理課案件に関わる指揮・監督は、管理課長—事務局長—学長といった、一元化されたラインを有している。日常的な電気の維持、管理、及びボイラー、重油等の管理には、現在のところ有資格者（技師）を当てている。実際の建物、設備の維持、管理については実績のある学外の信用ある業者のアドバイスも受けながら土地、建物及び設備の整備を行い、必要に応じて機器の修繕も外部業者に依頼している。法令等に基づく設備の点検、整備業務（防災設備、エレベーター、電気設備等）は各々専門の業者に委託している。宮前平キャンパスの管理についても、本学の職員の責任のもとで業務委託を行っている。小規模な大学とはいえ、この点では本学の責任体制はある程度確立されている。なお、大学院についてもまったく同様なシステムで運用されている。

#### [点検・評価と改善の方策]

施設、設備の老朽化が進み、現在は使用可能な施設、設備も順次更新の時期を迎える。そのため、日常の故障対応、点検に追われる頻度は確実に増している。

その反面、快適なキャンパスライフを維持するために、施設、設備の拡充も行わなければならない。現在は全ての教室、研究室に冷暖房設備を装備している。また情報関連機器等の導入のために光熱水費が増化する傾向がある。また建物自体にゆとりを求められるようになり、高度化した設備機能や新たなシステムの導入も大いに予想されるところである。本学のような小

規模大学では施設管理面に割けるマンパワーはおのずから限定され、施設管理業務のかなりの部分は外部の業者に委託せざるを得ない。しかしながら、全てを外部業者にアウトソーシングしてしまうと管理体制が不十分なものとなりかねない。その意味で専任職員の果たす役割はますます大きくなっていく。本学の現在の状況を十分に理解しつつ、今以上に専門的な知識を身に付け外部委託業者に適切な指示をだせる人材の育成が必要と考えられる。

### 2) 施設・設備の衛生、安全を確保するためのシステムの整備状況

#### [現状の説明]

学内の諸規程（防火管理規程、保安規程）により、法令に基づく各設備の点検、整備、報告をおこなっている。管理面では必要な有資格者（電気主任技術者、ボイラー技師、危険物取扱主任者、防火管理者）を配置し、施設、設備の保守、点検、整備については専門業者に委託している。委託業務は、消防設備、昇降設備、給排水設備、ボイラー設備、変電設備、特定建造物の定期点検、庭園整備、防虫施工等多岐にわたる。また、定期的に教職員、学生対象の避難訓練、教職員対象の防火訓練も実施している。大学院についても全く同様なシステムで運用されている。

#### [点検・評価と今後の方策]

学内の規程には新設した部署が入っていないなど、一部整備が行き届かず、また、実際面ではかなりの部分の設備も老朽化し、更新する必要もある。電気、ガスの使用量も増加している。安全、快適な研究、教育環境を維持するに当たり、諸規程を整備し、訓練を一層密に行い、教職員の防火意識を高め、また、古くなった設備の更新、整備、省資源化そして経費節減に向けて今後も十分に留意していく必要がある。

## 「8 施設、設備等」の総括

本学の、今後の施設、設備の在り方については、大規模なものとしては、10年後の完成を目指す、1号館の建替えがある。さらに、1号館に遅れること6年で、2号館が建設されたのであるから、2号館の建替えも、今後の大規模建設の視野にいられて考える必要があろう。

その他の、施設設備については、16年度発足が予定されている“将来検討委員会（仮称）”で今後の方向が決められよう。現在、「教育方針・体制策定会議」で、今後の本学の教育方針・体制が固められつつある。これを軸として、“将来検討委員会（仮称）”で今後の本学のグランドデザインが構築されよう。その結果、このグランドデザインを支持、推進するものとして、施設・設備の今後の在り様が検討されよう。

少人数教育、外国語・情報教育の充実等にふさわしい校舎、教室、設備等の在り様が自ずとあるはずである。社会人に門戸を開放する、国際交流を活発にする等の諸施策に適切な施設・設備の在り様もあろう。学園生活をトータルに満足させるアメニティ・ニーズへの対応もはからねばならない。以上のような、ハードな面だけでなく、利用基準の緩和、利用時間の延長といったソフトの面での対応も検討されよう。

先に見た、1号館の建替えは、10年後の完成を目指すとなると、基本設計は5年後位より始める必要がある。となれば、“将来検討委員会（仮称）”の結論も、当然のことながら、基本設計に反映される必要があることから、その検討を急ぐ必要がある。委員会の発足は16年度であるから、早いうちに中間答申を出し、実行できるものは直ぐにもとりかかり、全体の結論は遅くとも3～4年後ぐらいまでには固める必要があるだろう。